

## 第5回留学報告書

### アドバイザー探し

NYUでの三年目が始まり、授業主体だった生活から研究主体の生活へと移行しているところです。この学年では、自分が選択したアドバイザーの指導を受けながら研究をし、学内で計2回のプレゼンをし、学年の終了時に一本の論文としてまとめ、提出するようなカリキュラムになっています。一方で、NYUでは授業の規定単位数を満たさなければならないため、授業も引き続き受講しています。二年目でとった授業とは異なり、論文を提出する機会のある授業を履修することで、なるべく研究に使う時間を増やしています。

今回の報告書では、今後研究の指導をしてもらおうアドバイザーとなる教授とのマッチングが「うまくいく」ように、私なりに考慮してきたことを記述します。私にとって「良いマッチング」であるとは、自分が優れていると考える研究がアドバイザーも同じような観点で優れていると評価していることです。もしここに軋轢があると、自分で良い研究をしている、面白い結果だと思っても、アドバイザーに共感してもらえず、孤立無援に感じてしまうからです。私にはこのマッチングを考える上で参考になった機会が大きく分けて三つありました。学内のセミナー、授業、そして自分の専門分野の論文を読んでいる時です。

まず、学内のセミナーでは、学内外の発表者に対して、学内の教授陣がコメントをするため、それぞれの教授が優れていると思うパンチライン、方法論はどこにあるのかを把握することができます。さらに彼らのコメントや質問に共感する、もしくは自分にとって勉強になるコメントを残していると感じられるのならば、その教授との相性は良い可能性があると考えました。

次に授業では、むしろこちらの質問やコメント、課題に対してどのような反応をするのかを見ることができます。特に二年目で専門科目を受講している時に、建設的なコメントを自分がしたと思った時にそれを褒めてくれるのかどうかを確認しました。また、指導に対する熱意を判断するために、提出した課題にどのようなコメントをくれるのかも着目していました。

最後に、学内の教授陣がどのような研究に関心があるのかを論文を読む際にチェックしていました。自分が読んでいる論文が学内の誰かが書いたものであれば簡単ですが、いつもそうであるとは限りません。さらに、教授が書いている論文のみが彼ら/彼女らの関心領域だと思えば、それは実際のものよりも狭く考えていると思います。したがって、私が着目した点は、論文に引用されてい

る、もしくは引用をしているか、さらに、論文の謝辞に名前が載っている、つまり個人的にその論文にコメントを何らかの機会にしたかどうかです。

こういった観点を踏まえ、現在一人のアドバイザーを見つけ、研究指導をしてもらっています。今後このマッチングがうまくいくかどうか不明瞭ですが、現時点の私の情報の限りで最善だと思います。受講している授業も含め、他にも様々な論文を書く機会に恵まれており、これを気に他の教授たちにも研究を見てもらおうと考えています。NYUの経済学部の特長の一つは私の専門であるマクロ経済学とその関連分野の教授陣の質、多様性、その厚さだと思います。したがって、アドバイザー探しは贅沢な悩みです。

末筆ですが、船井財団の皆さまの多大なる包括的なご支援に深く感謝申し上げます。素晴らしいアドバイザーに継続的なサポートしてもらいながら研究を進めている今はとても充実しているように感じます。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。